チョウが好きな人は、それぞれ必ず忘れられない強烈な思い出となるチョウとの出会いをいくつか経験して、どっぷりとチョウの世界へとのめりこんできていることと思われる。筆者にとってメスアカムラサキは出会いのシーンがいつまでもありありと思い出せるチョウのひとつで、それは初めての石垣島訪問時の体験である。南国のチョウのムラサキの輝きはオオムラサキやコムラサキとは違った美しさで、いつまでも筆者を魅了し続ける。

1993 年 9 月 4 日　石垣島バンナ岳

石垣島 9 月初旬の陽ざしは午後 3 時過ぎでもまだまだきつく、長ズボンをすそから捲り上げた急造の半ズボン姿で汗まみれの登りとなる。最初の坂道は両側樹木がトンネル状に陰をつくっていてヤエヤマムラサキなどが出てきてもよさそうな気配であるが、あいかわらずゆったりとのどかに飛び遊ぶスジグロカバマダラと叢をヒョイヒョイと縫うように飛ぶリュウキュウヒメジャノメ以外に目ぼしい蝶は出てこない。急坂を登りきったところに岩を模した人工の大きな展望台が設けられており、とにかくなんでも見ておこう、と足を運ぶ。螺旋状につくられた歩道を展望台上に向けてまさに辿りかけたその時、キラリと金属色紫の輝きが目に飛込む。翅表の黒地に白紋がはっきりと認められるメスアカムラサキだ。人工岩をくぐるようにして裏手にまわると、いるいる。平坦となった裏手の広場を 1 頭のメスアカムラサキの♂が占有して、時折滑空するように旋回しては地面に降りて美しい紫の金属光沢を太陽光に反射させながらゆっくりと羽を開閉させている。夢にまでみた光景が今、目の前に現実として展開している。石垣島にまでわざわざ足を伸ばした理由のひとつがこの蝶との出会いを期待してのことであっただけに、ここでネットインに失敗することは許されない。ゆっくりと近づきネットの角度を確かめて振りおろし気味にかぶせ込む。あこがれのメスアカムラサキを初めて手にして深い感動を覚え、心臓の高鳴りがなかなか収まらない。この展望台下の自然林にはウルシ科と思われる白い花の咲く大木があり、高知市などで見るよりは青色が濃くて美しいミカドアゲハが競うように求蜜しているが、柄の短いネットでは文字どおり高嶺の花という存在だ。

石垣ﾊﾞﾝﾅ岳 Sep.4,1993 ﾒｽｱｶﾑﾗｻｷ♂

覚悟して徒歩でチャレンジするバンナ岳の山越えは予想以上にきついが、沖縄本部半島での平敷から伊豆味までの山越えにくらべるとたいした距離ではない。そう何度も来られるところではないとの思いで急坂をたどって TV 塔のある高台にも立ち寄ってみる。上昇気流が吹き上げていて涼しく気持ちがいい。この辺りの山頂であることを示す三角点を囲むようにマツバボタンの花壇がありメスアカムラサキがいてもよさそうだ、そう思ったらやはりいる。南に面した背の高くない木の葉上にピッタリと羽を閉じて静止している。翅表の黒地に鮮やかに映える白紋が羽の裏側からも淡褐色の帯といいコントラストで透けてみえ、その特徴的な模様からすぐに本種だと見分けがつく。これで 2 頭目をいただきだと、慎重に近づいて横から払うようにネットを振り抜く。ところが‥‥無念。どんなタイミングですり抜けられたのか、ネットの中にメスアカムラサキの姿はない。悔しいけれどもメスアカムラサキの瞬間わざにしてやられたわけだ。この蝶の習性として占有場所にまたもどってくることを期待したのだが、このあと 1 時間ほどの粘りではふたたびメスアカムラサキをみることはできず。その間、大型のリュウキュウムラサキがスーイスイと風の流れに乗って高台を横切っていき、また、コノハチョウだと思われる赤茶色のタテハチョウが、かなりのスピードで忙しく羽ばたきながら高台をかすめて飛んで行った。

その後、生きた♀を持ち帰っての飼育も経験し、ぴかぴか新鮮個体の紫幻色を楽しめた。

Copyright© 1993- Soft House JUMP. All rights reserved.

1996 年 10 月 10 日　波照間島

突然晴れ間が広がった瞬間がすごかった。いっせいに蝶が湧き出るがごとくに数を増したのだ。最初に目に入ったのがボロのリュウキュウムラサキ。ネットインして♂♀を確認する。先ほどのおじさんが♀だと太鼓判を押してくれる。ボロでも♀なら OK。とにかく生かして持ち帰れるメスが本命。今回の主目的「サツマイモでの二度目の飼育」に望みがでてまずはほっとする。気分をよくしたところで、急ぎ自転車を踏んで南地区の入り口側にもどるや、さらに感激すべき情景に出くわす。現実なのか、と疑わせるような金属光沢の濃いムラサキを輝かせた複数頭のリュウキュウムラサキが狭い緑の空間で楽しげに滑空している。卵を産んでくれる♀ならボロでもいいが、標本とするにはやはりムラサキの輝きが濃くて美しい♂の捕獲が優先する。新鮮な♂を捕らえて気分がハイとなっているところに森さんのバイクがもどってきて、筆者の右前草叢にリュウムラの大型♀が静止したと教えてくれる。ありふれた台湾型だが新鮮体である。飼育の話をするとメスアカムラサキの♀で、白い三角模様のある面白い個体を生かしてもっているのであげようと取り出してくれる。うれしくて、宿が「みのる荘」だと確認する。後に、その宿の公衆から高砂に電話をした際の面会時に三角紙に住所と名前を書いてもらい、実はこの時点で初めて奈良市の森さんだと知る。

このあと南を離れ、ちょうど運動会で地元民が大勢集まっている小・中学校を覗きがてらの周辺探索で好結果をえる。まず、メスアカムラサキの♀が採れたこと。標本としても価値ある新鮮体だったが、この母蝶は高砂で 10 月 16 日からなんと 130 個もの卵を産んで大量飼育を可能としてくれた。試みに共存させたマツバボタンにも産卵がみられたが、後でジュースを飲ますためにティッシュを乗せた皿にも産卵したことや、幼虫時代にマツバボタンは決して食べなかったことなどから、食草と認知したわけではないことが結論づけられた。この母蝶は 10 月 31 日まで生きて合計 130 卵ほどを産んでくれ、その 9 割ほどが孵化した。食草のスベリヒユは、当座、石垣市内から持ち帰ったものと、近所をくまなく探して採取したものだけで、妻が荒井町のイモ畑に大群落をみつけてくれていなかったなら、神戸市の蝶友北原氏に 20 卵ほどを分譲した残りの100頭あまりをとても最後まで育てきることはできなかっただろう。終令幼虫の旺盛な食欲は想像以上で毎朝夕の糞の掃除がまた大変だった。もう二度とメスアカムラサキを大量飼育する気にはならない、それだけ手間ひまのかかる蝶だったが、郷里高知市五台山の牧野植物園で稲垣技師さんに送ったものが温室内で元気に飛び遊んでいるとか、札幌の蝶友岡田氏からは「窓の外の雪景色にムラサキが映えてとてもきれいだ」という電子メールが届き、香川県三豊綜合病院副院長の大屋崇先生からは「貴重なサナギをありがとう。無事羽化しました」という年賀状をいただくなど、あそこまで苦労して飼育した甲斐があったと思う。

生きた母蝶を弱らせることなく持ち帰れたコツは、三角紙から出してタッパーウエア内に移し、羽が広げられる空間を確保して、空港での待ち時間などに適度に水分をあたえたことだと思う。この工夫は、森さんから譲り受けた三角紋のある♀が与那国島でのチェック時にすでに命尽きていたことへの無念さから思いついたもの（図示した飼育羽化♀は右前翅に白斑が出た異常個体）。

波照間飼育 Nov.25,1996 メスアカムラサキ♂

Nov.23,1996 波照間島産飼育羽化♀

Copyright© 1993- Soft House JUMP. All rights reserved.